

現地レポート 03

沈下橋建設と暮らしの変化

ミャンマー連邦共和国 マグウェ地域 タイエツ地区

テザ橋（橋長 95 m／幅員 4 m）

2017 年度の事業で建設されたテザ橋はタイエツの町から北北西に車で約 30 分、アウンランの町側のニャウンジツ村とチーダイン村の境に架かっている。この沈下橋は、9 村、約 4500 人に裨益する。この辺では、米、豆、ゴマ、玉ねぎなどを主に栽培している。

ニャウンジツ村にある中学課程まで教える僧院学校に、大勢の村人が集まり到着を待っていた。活発に意見を述べる姿から沈下橋に対する深い思いを感じた。

僧院学校はテザ橋近くの高台にあり、橋の全景が見渡せた。早く授業を終えた生徒たちが帰宅する様子が見えかけた。

沈下橋がまだ完成していない時の雨季は、河川の水流が激しく、ボートなどは流されてしまうため使用できず牛車に頼っていたそうだ。もちろん車も渡れない。そこで牛車に荷物を載せ 1 袋 500 チャット¹支払い、河川を渡っていた。人が渡る時には親しい人たちと時には手を繋ぎ、一緒に渡っていた。流れが激しく、1人で渡るのが怖いからだ。雨季はいつも着替え用の服を持っていかなければならなかった。そして、みながいとも雨量のことを心配していたという。なぜなら雨が降って水位が増すと河川を渡れず、休校になるからだ。そのように学校が休みになる日も多かったそうだ。それが今では沈下橋のおかげで、休校になることはなく

執筆・撮影者紹介

兵頭千夏さん

ヤンゴンを拠点に、ミャンマーの人々の生活・伝統文化・信仰・女性をメインテーマに撮影している写真家。2003 年よりヤンゴン文化大学に 2 年間留学し、ミャンマー語の通訳者、翻訳者としても幅広く活躍しています。

今回、JIP の沈下橋建設事業がミャンマーの人々の暮らしをどのように変えたのか、現地の撮影や住民へのインタビューを通して、レポートをしていただきました。



タイエツの町側
ニャウンジツ村から見たテザ橋

なった。橋を利用する教師にとっても授業の前に疲れ果てることはもうない。近辺の村に高校がないため、進学する場合、タイエツの町で寮生活をしながら学ぶことになる。親元を離れて暮らす子どものもとへすぐ駆けつけられるようになったこともありがたいという声が聞かれた。

沈下橋が完成したことで、保健面の不安が払拭されたという。急患が出るとタイエツの町の病院に搬送するのだが、雨季で水位がある時は牛車でも渡れなくなってしまった。そういう時は筏を担ぎ、患者を乗せて川を渡っていたそうだ。それが今では直ちに搬送できるようになり危険にさらされることがなくなった。

また、近隣の村々を政府の保健センター職員約 10 人が交代しながら子どもたちに予防接種を打っているのだが、今は雨季でもバイクに乗って問題なく往診に来てくれるようになった。雨季の時は立ち往生することもしばしばだった。

経済活動も活発になった。牛車に荷物を載せ替える必要なく、人と荷物を積んだ大きなトラックが毎日 12 台ほど橋を利用しているそうだ。トラジーと呼ばれる三輪車 10 台が日に 5 回往復し、タイエツでの商売や買い物客のための足となり活躍している。

村人の Daw San Naing Win (38) は、毎日 2 回は沈下橋を往復しているという。栽培している豆の畑が橋の向こう側にあるからだ。そして、橋の下を流れる川で毎日、洗濯と水浴びをしている。「橋が出来てからは一年を通じ生活がとても便利になりました」満面の笑みを見せていた。

ちなみに昨年の雨季の間、橋が渡れなかったのは 1 日だけ。次の日には水位も下がり、三輪車も往来できるようになっていたそうだ。

橋の建設は約 4 ヶ月だった。現場で働くと 1 日 6,000 チャットが支払われていたそうで、ニャウンジツ村の男性も数名汗を流していたそうだ。働いていた男性は、基礎工事は固いところまで深く掘っていて、しっかりと



橋の全景



下校風景



下校風景



足が不自由にも関わらず、橋の完成を楽しみに建設現場へ日参していた村の長老

レベルの高い工事だと感心していたそうだ。高齢で働くことは出来ないが、橋ができるのが楽しみで、毎日建設現場を見に行っていたおじいさんも「見たことのない頑丈な造りだよ」と嬉しそうに語っていた。

村人たちは、これまで河川を渡るのは大変だったがこんなにも村が便利になったと Facebook で投稿したり、親戚に話したりしていると自慢げであった。もう河川の水量が増しても怖くない、子どもたちが安全に学校に通えるようになった、本当にありがたいばかりだなど、口々に話す村人から、感謝と喜びの言葉が聞かれた。

橋が長く使えるよう、牛車は雨季のみ渡ることを許可し、それ以外は橋のそばにある牛車道を渡らせている。牛車の鉄の車輪で橋面を痛めさせないためとのことであった。この辺は牛車が現役で活躍しているので、収穫物を積んだ牛車が渡れるよう橋桁を高くして欲しいと村が依頼したそう。そこで心配になるのは、子どもたちが橋から落下したら大惨事になるということだ。村人や僧院学校の U Kyi Maung (41) 校長たちは、これまで落ちた人はいないと答えた。学校や家でのように交通安全教育をしているのか尋ねてみた。村人たちは、橋の端は歩かず、真ん中を歩くようにと子どもたちに言っているという意見が多かった。U Kyi Maung 校長は、雨季の時、自転車や車が来たら端によって立ち止まること、橋の上では遊ばないようにと朝礼などで時々話していると付け加えた。しかし、元気に橋の上を走る少年たちを見かけたので、問題が起きないように注意喚起が必要と感じた。テザ橋は高さのある橋なのでなおさらだ。

沈下橋が建設されたことで悪くなったこと、困っていることはないか質問してみた。ニャウンジツ村の U Tin Thein (52) 村長は「困ったことはないですよ。嬉しいことばかりです。ただひとつ気がかりなことがあります。橋と道路の取付け部分の境目が当初より、6センチ(2インチ)ほど低くなってしまっていることです」と話してく



静かに渡るよう言い聞かせても走る子どもたち
安全指導は何度もおこなう必要があるだろう



ニャウンジツ村の人たちと僧院学校の児童生徒による記念撮影



橋の下を牛車が行き交う



村の自助努力で建てた河道を変えないための柱

れた。【写真参照】DRRD²の U Ko Ko Min が、エンジニアの視点で問題ないことを説明してくれたので安堵したようだ。

それよりも河川には堤防がなく、激しい水流により浸食していることを DRRD の U Ko Ko Min が教えてくれた。村人たちは浸食されぬよう、また河道が変化しないよう制御する柱を自助努力で建てていた。今年の10月以降には国家予算で、河道を一定に保つための整備をすることになっているようだ。

また雨季に水量が増し、水が引けると流木やゴミなどが橋の周りに堆積されるが、その片付けは近隣の有志の村人が駆けつけ、速やかに片付けるようにしている。それもこれも河道を変えてしまいかねないからとのことだった。しかしながら、橋維持委員会を作るなど、体系的な活動を取組んではいなかった。

「今、さらなる願いは、まだ土を固めた道路なので舗装道路になれば、ということです」やる気に溢れ、村の発展を考える U Tin Thein 村長から、こんな言葉が最後に聞かれた。

村人と授業が終わった僧院学校の児童生徒たちとで記念撮影をした。そして、列を組んでおしゃべりしながら静かに児童生徒たちが下校していく様子を村人たちは見守っていた。

所感

沈下橋建設事業は現地ニーズに沿うもので妥当性は高く、JIP の上位目標も達成されていた。沈下橋の建築は効率よくおこなわれ信頼を得ていた。近隣住民の生活環境を大きく向上させ、負の影響はなく、経済的・社会的インパクトが見られた。

沈下橋建設を実施したことで、近隣の村々との連携がなされ、良好な関係性が築かれていることも感じられた。橋の建設を成功させたことで自信もつき、村の発展にかかる活動を積極的に取組みたい意思が感じられた。浸食も起きている地域であるが、持続、自立発展のための組織作りははじまっていなかった。牛車の橋通行禁止程度であった。フォローすべき点として、橋維持委員会などの組織作りを促してもらいたい。今般の話し合いの場で積極的に意見を述べる女性が数人いたのだが、建設時の橋建設委員会に女性は参加してい



橋と取付け道路にできた約 6 センチの差



ニヤウンジツ村の U Tin Thein 村長(右)とオウツシコウツ村の U Aye Win 村長(左)

銘版の前にて



通行止めゲート

なかった。ジェンダーの配慮はなされていなかった。高さのある橋にも関わらず、きちんとした安全指導がおこなわれているとは言い難く、配慮が欠けていると感じた。

懸念事項として、政府の予算による護岸工事で浸食を防ぎ、また河道が変化しないかという点である。沈下橋に悪影響が及ばないようにフォローする必要を感じた。同事業は、地域住民のインフラを改善し、社会経済活動に貢献する意義ある事業であったと思われる。

¹ ミャンマーの通貨単位。500 チャット≒35～40 円。

² ミャンマーの建設省地方道路開発局 (Department of Rural Road Development) の略称。